

派遣報告書

専門家氏名：藤木俊也

所属：山梨県総合農業技術センター

派遣先：インドネシア共和国ジョグジャカルタ特別州

派遣期間：平成29年11月27日（月）～12月6日（水）

指導分野：農業

タイトル：ジョグジャカルタ特別州との友好協力の覚書に係わる専門家派遣

1. 派遣先

(1)派遣先機関名：ジョグジャカルタ特別州農業局

ジョグジャカルタ特別州はジャワ島の中心に位置し、面積は 3,200km² で山梨県の 4,465km² より狭いが、人口は 350 万人（ジョグジャカルタ市 60 万人）と多い（山梨県は 83 万人）。

(2)派遣先の組織と業務内容

農業局には食用作物部、園芸作物部、畜産部、農産加工営業部があり、今回派遣されたのは園芸作物部で、当部には、園芸作物農産施設およびインフラ課、園芸作物生産課、園芸作物土地水管理課がある。農業局の出先として各地域に農業指導所と種苗開発センターがあり、それぞれ地域の農業生産指導、主要品目の育種（作物、野菜、花き）・種苗生産・展示を行っている。

2. 受入体制

(1)専門家の受入先での位置づけ

平成28年11月に山梨県とインドネシア共和国ジョグジャカルタ特別州との間で友好協力（文化、農業、教育、観光等）に係わる覚書が締結された。

今回、県観光部国際観光交流課の要請を受け、ジョグジャカルタ特別州の農業情勢や課題等を調査するため、平成29年度11月27日～12月6日の10日間の日程で、農政部の農業技術職員が訪問することとなった。

今回の派遣に当たって、ジョグジャカルタ特別州農業局からは

- ①農作物に対する環境に優しい害虫駆除
- ②農作物に関する生産増加技術
- ③農作物に関する種子生産技術
- ④農作物に対する土壌肥沃技術
- ⑤人材育成

と幅広い分野についての指導、助言を求められていた。

(2)その他(スタッフや予算、組織など特に気がついたこと)

通訳については、ジョグジャカルタ特別州でガジャ・マダ大学の学生 Heri 氏(経済学部)と契約してくれしたが、日常会話には全く問題がないものの、会議や現地での通訳を行うには技量(話の要点をまとめたり、専門用語など意味が通らなかった場合に補足して会話すること)が足りなかった。このことから、2日目の講演は、クレア職員の Tingshan さんが英語にて通訳(日本語から英語、英語からは州の職員や大学教員がインドネシア語へ訳し、インドネシア語からは逆に英語を介して日本語に)してもらうこととなった。また、翌日からは、クレアシンガポール事務所の橋本所長のご英断により、クレアの方で現地の通訳を探していただき、視察の3日間と報告会の日の計4日間の契約(費用も負担)をしていただいた。海外支援において通訳の果たす役割は大きく、派遣の成否の大きな要因となることから、人選にあたっては慎重に進めるべきと考えられた。

3. 指導内容

(1)具体的指導内容

派遣日程

- ① 11/27(月) 出国 ジャカルタ経由ジョグジャカルタ
- ② 11/28(火) ジョグジャカルタ特別州 Gatot Saptadi 事務次官表敬訪問
講演(山梨の農業、総合農業技術センターの紹介)
意見交換、歓迎会
- ③ 11/29(水) パクム、トゥリ農業指導センター管内農家の視察
- ④ 11/30(木) チャングリカン農指導センター管内農家の視察
ウンブルハルジョ種苗センター(園芸:果樹、野菜、花き)
- ⑤ 12/1(金) サミガルー農業指導センター
ウィジラン種苗センター(作物:米)の視察
(ジョグジャ・アグロ・テクノ・パーク建設予定地)
- ⑥ 12/2(土) 調査研究とりまとめ
- ⑦ 12/3(日) 王宮、世界遺産視察(ホロブトール遺跡、プランパナン遺跡)
- ⑧ 12/4(月) 報告会・意見交換会 ～送別会
- ⑨ 12/5(火) 市場視察(花き、果樹、野菜の3ヵ所)～夕刻 出発
- ⑩ 12/6(水) 帰国

《 11月28日 午前 》

ジョグジャカルタ特別州 Gatot Saptadi 事務次官を表敬訪問した。事務次官からは「これを機にジョグジャカルタ特別州と山梨県の農業分野での友好協力が末長く継続することを期待する」との挨拶を頂いた。



州庁舎と表敬訪問の様子



左から Sasongko. M. Si 農業局長
Gatot Saptadi 事務次官
藤木
クレアシンガポール事務所橋本所長

《 11月28日 午後 》

山梨県の農業、総合農業技術センターの業務、私の研究業績について講演した。その後、ジョクジャカルタ特別州 Sasongko 農業局長より、「ジョクジャ・アグロ・テクノ・パーク」構想について説明があり、農作物などの栽培(植栽)や技術展示(温室内外)について助言が求められた。テクノパーク構想についてはここに来て初めて知ったことから、視察の最終日に建設予定地を見てみたい、山梨に帰ってから県に話をつなぐと回答した。

出席者からの質疑、意見交換を行った。各地域の農業指導センター担当者からは、熱心な質問が出された。意見の多くは、新規栽培希望品目(イチゴ、ブドウなど)、土壌改良、有機農業における堆肥の作り方や殺虫方法についてであり、大まかには回答したが、翌日以降、現場を視察しながら助言することとした。



講演会の様子(農業局会議室)



農業局職員、ガジャ・マダ大学教員
(農業局玄関ホール)

<視察>

11月29日から12月1日までの3日間現地視察を行った。視察は右図のとおり、州北部、ムラピ山(標高 2,962m)南麓の標高 600~800 の高標高地域(ジョグジャカルタ市内は標高 100m)の各農業指導所、生産者、種苗供給センター等を巡回した。

《11月29日(視察1日目) 午前》



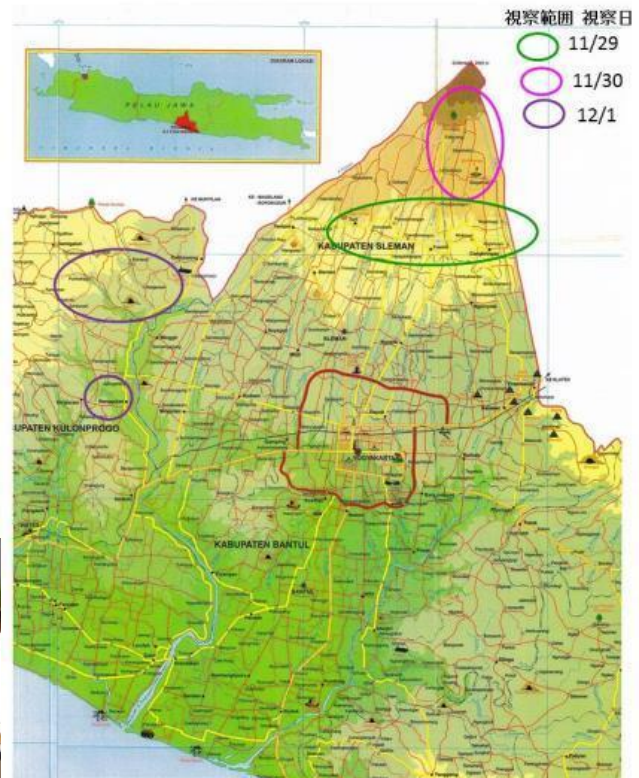
パクム・トゥリ農業指導センターでの様子

【パクム・トゥリ農業指導センター】

管轄内における農業の状況について Sigit Widiyanto 所長より説明を受けた。エリア内には 9 村、農家 165 戸、6500 人がいる。農家は高齢化が進んでいるが、後継者はこれまでとは異なる収益性の高い農業を目指し、スネークフルーツ(サラック: 中国等へ輸出)、ジャックフルーツ、アボガトなどの果樹に加え、有機野菜、トゥガラシ、キクなどを栽培し始めている。また、この地域ではイチゴ、ブドウの栽培希望が多い。いずれにしても、新規品目の栽培については、技術は未熟(初心者)であるが、技術習得の意欲は高い。

【OMAH STRAWBERRY JOGJIA イチゴ栽培農家】

園主は Slamet Widodo 氏であり、今年から観光イチゴ園(無農薬・無化学肥料、レストラン併設)を開業した。来客数はますますだが、収穫量が少ないことから、規模拡大を図りたい。今後はブドウの栽培も始めたいとのことであった。



今回巡回した地域(11/29,30,12/1)



ムラピ山(標高 2962m)

ネギの栽培状況

【Ketia Astha Bunda、キクの栽培農家集団】

キクの栽培をグループで行っている Ketia Astha Bundaのリーダーである Andi Nurhayanta 氏の農園を視察した。グループの設立は 2008 年で 50 戸の農家が月 4 万本を出荷、開花時期をずらすことが難しいこと、栽培技術が安定していない(農家間の差が大きい)ことにより、需要の 15%しか生産できていないとの話であった。

まず、需要があることが一番重要で生産すれば売れることはうらやましい。グループ内の技術向上については、グループ内での研修や情報交換、指導センターやリーダー農家(計画栽培が行える農家)での栽培研修(できれば1作住み込み)を積極的に行うことなどを提案した。栽培ハウスでは、網室内でコナジラミが多発しており、網の張り方や防除法を指導した。また、株分けも罹病株からは行わず、ウイルス罹病の問題もあり、何年かに1回は、無病苗の導入を図ることなどを提案した。



キク栽培温室(天:雨よけ、側:網)



網室(種苗増殖・育苗室)

《11月29日 午後》

【トウガラシ有機栽培農家】

トウガラシは儲かる作物であり、2000 年から栽培を行っている。115 人のグループで 2,000haを栽培している。雨期の病害対策についての質問と堆肥施設(現在は他から堆肥を購入)や収穫後の作業場所(路地で行っている為、雨期は困難)の設置要望があった。

雨期の病害対策については、雨よけ栽培、ほ場のローテーション(連作の回避:飼料用トウモロコシなど)を提案した。施設については州の職員が対応した。



トウガラシの栽培状況

【サラック(スネークフルーツ)栽培農家・共選所】

ジョグジャカルタ州の特産品であるサラック(スネークフルーツ:皮がヘビの鱗に似ている)栽培農家と共選所を視察した。栽培には特に問題はなく輸出も順調に伸びてい

るが、輸送中の腐敗が問題となっていた。対策として、早期収穫、低温出荷（特に輸出品）、エチレン発生阻害剤（利用出来るかは？）の利用などを提案した。



左：サラックの栽培状況 上：供選出荷所



左：着果部位 下：果実

《11月30日（視察2日目） 午前》

【グラガハルジョ（GLAGAHARJO）村役場】

スレマン県農業漁業教育センター長の Purwati 氏よりこの地域の農業状況の説明を受けた。この地域はムラピ山麓の特に標高が高い地域である。5年前の噴火により農場はダメージを受けたが、コーヒーや果物の栽培が盛んである。今後は有機野菜（特にトウガラシ）イチゴ、ブドウなど収益性の高い作物を栽培したいとの話があった。



グラガハルジョ村役場での意見交換

【グラガハルジョ村：観光農園にしたい土地】

今は果樹栽培であるが、ここを開墾しブドウやイチゴを栽培し、観光農園にしたいとのことであった。

もう一カ所、果樹栽培農家を視察した。



中央：園主
右：通訳 Nuget さん



ジャックフルーツと開墾予定地

【ケツポハルジョ (Kepuharjo)】村観光農園にしたい土地2】

グラガハルジョ村と同様、遊休地でイチゴとブドウを栽培し観光農園としたいとの説明を受けた。また、別の農家は遊休地にコーヒーを植え、自家栽培のコーヒーを観光客相手のカフェ(既存:Kopi Merapi)で販売したいとのことであった。

この地域では観光農園をしたいとの希望が多かった。確かに、この地域はメラピ山麓の観光地であり、噴火博物館などをジープで巡るツアー客が大勢来る。博物館やジープへの乗り換え場所付近には、土産屋はあるが、販売しているものはTシャツなどありきたりの物で地元の果物やジュースやアイスなどの加工品を食べさせる店はなかった。また、カフェでも果物の販売はなく、バナナ(日本では食べたことのない赤い実で、味の濃い甘いバナナでとても美味)の天ぷらのメニューはあるが、バナナジュースやアイスはなかった。これだけの観光客が来る所であるので新たにイチゴやブドウ栽培を始めなくても、地域にある果物を加工するなり、上手く販売することも一つの方法ではないかと提案した。



開墾予定地



コーヒー栽培地(定植直後)



Kopi Merapi (カフェ)の様子



ピサンゴレン (バナナの天ぷら)



ムラピ山火山博物館、駐車場の売店とジープ(短時間に50台位は遭遇した)

【ウンブルハルジョ(Umbulharjo)村】

有機栽培のトウガラシ農家(2戸)とキュウリ農家を視察した。いずれの農家も雨期の栽培方法、特に病虫害防除が難しいとの話であった。トウガラシ農家では炭疽病の多発が問題となっていた。雨よけ、罹病株の撤去、種子感染について説明した。



トウガラシの栽培状況



キュウリの栽培状況



栽培されているキュウリ
(市場での写真)

右)トウガラシ(市場での写真)



トウガラシの栽培状況(2カ所目)



トウガラシの病害(炭疽病多発)

《11月30日 午後》

【ウッケルサリ(Wukirsari)村有機栽培農場 TANI ORGANIK MERAPI(TOM)】

ウッケルサリ村で野菜の有機栽培を行っている TANI ORGANIK MERAPI(TOM:オーナーWijanarko 氏、Suigirto 氏の共同経営)を視察した。現在はガジャ・マダ大学の協力のもと農場を経営している。アブラナ科野菜を中心に栽培し、オーガニック野菜として特別な取引先(ジョグジャカルタ市内の高級スーパーでは通常栽培品の2倍程度

の価格で販売していた)もあるとのことであった。定期的に土壌診断、植物体の分析を行っており、経営は順調である。

土作りや病害虫の防除なども上手く行っているようであったことから、農家の研修受け入れを提案したが、技術が広がるのは好まないようであった。子供達への食育やガジャ・マダ大学学生の卒論研究は受け入れているようであったことから、企業的な経営では難しいのかもしれないが、人夫を雇用しているとのことだったので、労働力として研修生を受け入れて地域農業への貢献(技術指導:日本の有機栽培では多い)もしてほしいとの話をした。



TANI ORGANIK MERAPI(TOM) 両端:オーナー



アブラナ科野菜の有機栽培状況



金属支柱の試験(これまでは竹、耐用年数1年)



ジョグジャカルタ市内高級スーパーでの販売状況

【ジョグジャカルタ特別州ウンブルハルジョ種苗センター(果樹、花き、野菜)】

種苗センターSuharto氏より施設の説明を受けた。当センターでは野菜(トマト、トウガラシ)や花き(キク)の育種と種苗生産を行っている。敷地は7.9haあるが3ha位しか活用出来ていない。州の職員は5人では場管理職員は20人(臨時職員)である。種子や苗の販売(市価の半額)で収入をあげなければならず、現在、職員の退職補充がなく、厳しい状況にあるとの話であった。

視察時は栽培が終わった後で温室、ほ場とも何も植わっていない状況であったが、この場所は昨日と今日に視察したパクム・トゥリ・カングリカン地域の中心にあり立地的

に良い場所である。ここでは主に育種と種子・種苗の供給・展示が主な業務となっているが、空いている土地や施設を利用して、農家の模範となる試験栽培（有機栽培やイチゴやブドウなど）や農家の研修施設として活用してはどうかと提案した。



ウンブルハルジョ種苗センター
右端：Suharto 所長



野菜栽培跡地



花き栽培跡地



未栽培管理地

《12月1日(視察3日目) 午前》

【クロンポゴ(KULONPLOGO)県サミガルー(SAMIGALUH)郡農業漁業森林教育センター】

Agusu 所長より地域の農業について説明を受けた。この地域では花の栽培が盛んであり、当センターでもキク4品種を育成し、種苗を農家へ提供している。標高の低い地域では稲作、標高 800m地域では花き(キク)の他野菜(トウガラシやトウモロコシ)の栽培が行われている。



アグス所長の説明と意見交換の様子



キクの栽培温室



キクの栽培状況



土壌は粘土質

【サミガルー農業用貯水池】

ジョグジャカルタ特別州が建設を進めている農業用貯水池を視察した。州知事予算（10 億ルピア:約 1,000 万円）で建設している。完成は来春の予定である。雨水と湧き水を貯水し、山間部の農業用水として利用する計画である。



貯水池の全景



右:貯水池の建設に携わった Suparyanti
園芸作物部長(工学士、インフラ課)

【異なる尾根筋にある貯水施設(既存)】



貯水池の全景(公園化)



貯水池周辺の風景

【シドハルジョ(SIDOHARJO)村、標高 800m の辺境の地での集落営農】

村の中心地から遠く離れた辺境の地(州の職員の先導でも何回も道に迷う)で20戸が生活している。これまでは週に1回野菜販売が来ていたが、価格が高いため、集落内の7件が有機野菜栽培を始めた。集落内での販売が主だが、収穫が多かった場合は地区でまとめ、村の中心部に出荷している。栽培の問題点は乾期における水対策(ポンプアップの限界)、病虫害対策(特に雨期)、限られた栽培面積である。

病虫害対策はこれまでの有機栽培農家と同じで、雨期には雨よけをした方が良いこと、網室内で虫が多発していたことから、網の密閉と害虫の早期発見・手による早期駆除を提案した。



集落入口(標高 800m)



集落の方々、私の隣シドハルジョ村長



野菜の栽培状況(ナス)



野菜の栽培状況(ハクサイ)



野菜の栽培状況と牛の飼育



網室内の種苗(虫害多発)

《12月1日 午後》

【ジョグジャカルタ特別州ウィジラン(WIJILAN)種苗センター(作物)】

Santosu 次長の話では、17haの敷地(標高 100m)にて水稻の品種育成、栽培・展示、種子の販売を行っている。州職員 9 人、栽培管理者 9 人で運営している。機械はほとんど使わず、田植え、収穫は全て人力で行っているとのことであった。この敷地の一部に前述した「ジョグジャ・アグロテクノパーク」が3年後の2020年に建設(州知事予算)される計画であり、果樹、野菜、花き、薬草の展示園、水族館、博物館、レストラン、農産物販売所などが建設される。



作物種苗センター Santosu 氏による説明



種苗センターの敷地及びテクノパーク建設予定地

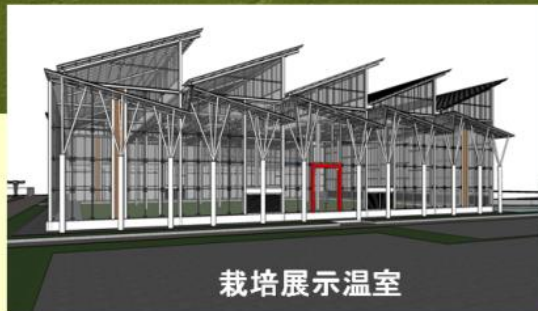
Jogja Agro Techno Park (2020年竣工予定)



農産物直売所



栽培展示温室



その他 農業博物館、レストラン、水耕栽培園、ドリアン園、フルーツ園、フラワー園、野菜園、薬草園、貯水公園、水族館

《12月4日》

【派遣報告会・意見交換会】

①11/29 から 12/1 の3日間、標高 600～800m のムラピ山麓地域を視察し、考えられた課題および対応策を中心にパワーポイント(英文)にて報告した。

＜報告内容＞

1. イチゴ、キクなど栄養繁殖性作物の栽培とウイルス感染の危険性について
2. 有機栽培における病虫害対策について
 - (1)天敵の繁殖等、環境(生態系)が変化するまでは我慢して待つこと
 - (2)雨季の病害対策としての雨よけの利用について
 - (3)コンパニオンプラントや草生栽培について
 - (4)日本における有機 JAS 農薬の使用と農薬散布による天敵の殺虫について
 - (5)現場で多く見られた炭疽病について(株除去や種子感染など)
3. 有機栽培における施肥技術
 - (1)土壌分析の必要性
 - (2)鶏糞の利用、完熟乾燥(ペレット)の必要性について
 - (3)残留化学物質(家畜飼料に含まれる物質)について
4. インドネシアにおけるブドウの栽培について
 - (1)落葉の必要性について
 - (2)日本の品種を栽培しても難しいこと、品種選定の必要性
5. 果実の低温輸送とエチレン発生抑制剤の利用について
6. 観光資源の活用と農産物やその加工販売について
 - (1)採れたて・新鮮のおいしさの PR と適所での販売
7. ジョグジャ・アグロ・テクノ・パークについて
 - (1)低地での栽培、温室内の高温対策など

②講演の後、ガジャ・マダ大学と州職員から出された質問・意見

＜大学＞

- ・インドネシアと山梨県との技術格差を縮めたい。
- ・大学には知識はあるが、それが現場には活かされていない。

＜州職員＞

- ・ジョグジャカルタ州には農家のための実践的な研究所がない。大学は高度な研究が多い。
- ・指導員、農家が有機栽培や新しい技術を学ぶ場がない。

③意見への回答

- ・日本の知識や技術、品種がジョグジャカルタでどれだけ使えるのかは不明であり、地元の大学との連携が早道かもしれない。また、有機農業では先進農家での研修も有効である。

- ・農家のための農業研究施設、農家の為の学校が必要と考えられる。現指導所の職員、開発センター職員をカジャ・マダ大学等に派遣して知識・技術を高める。必要に応じて山梨県への派遣も取り入れて技術力を高め、農家へ普及していく。

④報告会の最後に、農業局 Wiwin 園芸作物水土地管理課長が今回の専門家派遣事業の成果を挙げて閉会となった。内容は(2)指導の成果に記載。



報告会・意見交換会の様子
(HOTEL GRAND
DAFAM ROHAN JOGJA)



報告会・意見交換会参加者

《12月5日》

派遣最終日の出発までの半日、当所は予定にはなかったが、ジョグジャカルタ市内の市場(花き、果樹、野菜)を視察した。

【花き市場】

市場というよりは花屋の集合地(100m の道路沿いに店舗が並ぶ)である。花の需要は主に贈答用と冠婚葬祭用である。気温が高いため日持ちは悪く、毎日入れ替えている。店の話では「全て売れるから廃棄はない」と言っていたが真実は分からない。とにかくキクが多い。今のところ需要の 15%しか地元(州内)産なく、もっと生産してほしいとのことであった。



花き市場の様子

左:バックヤード(中央の花輪を制作中)

右:数少ない冷蔵庫(ユリ、バラなど)

【果樹市場】

ジョグジャカルタ市営の公設市場である。160 事業者（飲食店、物販店を含む）が営業している。事務所の運営経費は事業者から市場内の清掃代や駐車代を徴収して賄っている。売上手数料は取っていない。

タイ、オーストラリア、中国などからの輸入品を含め、あらゆる果物が揃っている。取扱量が最も多いのは柑橘類（温州ミカンが多い）。毎日大量の廃棄物が出るため、ガジャ・マダ大学の協力で設置したバイオガス発電で市場内の電力を賄っている。

みかん・パイナップルの収穫期であるのにもかかわらず、宿泊したホテルでは全く出なかった。聞いてみると、高級ホテルでは地元産の果物はランクが低いから出さないとのことであり、あまり美味しくないリンゴやメロンなどが並んでいた。写真は中国産の高級ブドウ。わざわざ冷蔵庫から出して見せてくれたが地元の農家が栽培したがるのも理解出来た。



果樹市場
上：市場の様子、サラック、マンゴスチン
中：パイナップル、ミカン
下：中国産リンゴ、ブドウ

【野菜市場】

州内で生産される野菜が持ち込まれている。種類も多い。トウガラシが非常に多かったが、まだまだ需要はあるようである。葉菜類の品質は虫食いも多く、それほど高くはない。トマトはかなり早どりであり、ホテルで食べたものも青いままであったことから完熟のトマトを食べる習慣はないようである。キュウリは山梨の山間部で栽培されている在来系統に似ている短太タイプである。



野菜市場の様子
トウガラシ、スイートコーン
トマト、キュウリ
キャベツ、ハクサイ

(2)指導の成果

山梨県とインドネシア共和国ジョグジャカルタ特別州との間にて交わされた友好協力(文化、農業、教育、観光等)に係わる覚書に基づき、州の農業状況を把握することを目的として派遣された。

ジョグジャカルタ特別州農業局 Wiwin 園芸作物水土地管理課長がまとめた今回の専門家派遣事業の成果は次の通りである。

- ①特別州は生産技術が不足していることを痛感。さらなる技術習得が必要である。
- ②新作物栽培推進地をチャングリガン郡とスルネン郡の2箇所絞りこむことができた。
そこでの課題をまとめることができた。特に、果物(ブドウ、イチゴ)の課題が把握できた。また、サラクの輸出に向けて品質管理の方法を工夫する必要がある。
- ③有機栽培では肥料の改善や雨よけの設置などにより病気対策を進める必要がある。

- ④生産技術を学べる場が必要である(専門学校や教育センターなど)。種苗開発センターは育種・種苗生産だけでなく、特別州全体のための研究および農業教育施設にするのが良いことが分かった。
- ⑤ジョグジャ・アグリ・テクノパークに適した果物、野菜等を選定する必要がある。開発の際には山梨県に職員を派遣して勉強する。
- ⑥今月末の山梨県知事来訪時の視察先を決めることができた。

一方、山梨が取りまとめた項目は以下のとおりである。

- ①3年後に設立予定の「ジョグジャ・アグリ・テクノ・パーク」について植栽や展示についての助言をしていくこと。
- ②高標高地域における野菜の有機栽培技術やイチゴ、ブドウの栽培技術指導を行っていく。

＜特に以下の点に注意しながら進める＞

- ・「ジョグジャ・アグリ・テクノ・パーク」の建設予定地が平坦地の高温地帯であることを考慮する必要がある。
- ・有機栽培の指導にあたっては、現地における使用可能薬剤(日本での有機 JAS 農薬)や有機肥料の現地での分解特性等を調査する必要がある。
- ・ブドウについては休眠の問題(強制落葉技術、過去の青系ブドウ栽培経過の調査)を含め栽培の可否についても検討が必要である。
- ・山梨の栽培技術や品種をそのまま環境の異なる現地へは導入出来ないことから、ガジャ・マダ大学農学部等の協力も得ながら進めて行く必要がある。

(3)指導における問題点

今回の派遣にあたっては(1)専門家の受入先での位置づけ、の項目で書いたとおり、かなり漠然とした内容での要請であったが、実際には具体的な要請や質問が多かった。かなりの部分を宿題として持ち帰ることとなったが、訪問前に具体的な情報ともう少し長い準備期間があれば対応できた部分もあったと考えられる。初日の公演に関しても、山梨県(日本)における有機農業の成功事例等を説明できれば参加者の反応も違ったかもしれない。

いずれにしても、気候や風土がことなる地域での作物栽培については、見てみないと分からない部分、今回は見る事ができなかった乾期での栽培状況など、今後の交流に引き継ぐ事も多いと考えられた。

4. 人的交流

今回の派遣では歓迎会や送別会などで多大なおもてなしを受けた。また、派遣受け入れの窓口として尽力いただいたジョグジャカルタ特別州投資調整機関の Huda 氏、農業局の受け入れ担当として、ホテルの手配、視察先の選考、食事の手配、視察の同行をしていただいた園芸作物水土地管理課長の Wiwin 氏、公演や報告会の会場設営、視察の同行などをしていただいた農政局の方々、また、数多くの

現地を視察したが、それぞれの地域の特別州農業指導センターや種苗開発センター職員の方々、県または村の農業事務所職員の皆様、さらには多忙のなか快く視察に対応していただいた農家の方々、さらには、渡航・現地での随行にあたっては自治体国際化協会シンガポール事務所の弓指昭子所長補佐・上玉利茂所長補佐、緊急の通訳をしていただいた Tingshan さん、通訳の交代を決断していただいた橋本所長さん、そして急遽通訳を引き受けていただいたアミ(Amik)さんとヌグ(Nugu)さん、初日および最終日に通訳をしていただいた Heri さん、そして、山梨県の窓口として段取りを図っていただいた県観光部国際観光交流課職員、皆様のご尽力があって初めて、今回の派遣が大きな問題もなく遂行できたと思う。最後に、お世話になった皆様に対し深く感謝の意を表する。

＜歓迎会・送別会＞



王宮敷地内にあるレストラン
(知事経営)での歓迎会の様子



歓迎会の参加者
投資調整機関職員、農業局幹部



送別会の様子
(グランドパシフィック・レストラン)



送別会の参加者
投資調整機関職員、農業局幹部

5. 指導活動を終えての感想・意見

今回の派遣において感じたことは、自分があまりにもジョグジャカルタについて知らなかったことにあると思う。多分、日本人の多くもバリ島やジャカルタは知っていても、ジョグジャカルタについては知らないと思う。ま

た、日本ではジョグジャカルタの情報、特に農業事情が極端に少ないこともあると思われた。渡航前に、ビデオや出版物（HNKスペシャル：国王＜州知事＞・王宮）、地球の歩き方、インターネットでの情報で調べてみたが、視察するまで地名がどこを指しているか分からなかった（地図を現地で入手して初めて位置関係が把握できた）。

今回の派遣は、ジョグジャカルタ特別州と山梨県との交流の第1弾であり、今回知り得た事柄が、次年度以降、両国間の交流、山梨への研修や山梨からの派遣に活用されることを希望する。